（二〇一六年度）

7 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は21ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。消しくずはきれいに取り除くこと。
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

共生ということが自分と異なる者とのあいだで追い求められうるとするなら、共に生きていく相手との差異をどのように捉えるべきだろうか。もし、それを例えば、肌の色や体つき、あるいは言語や生活習慣が異なるといった、容易に観察しうる表徴の差異に還元するなら、「われわれ」と、この「われわれ」とは異質な者たちとの区別が固定され、両者が硬直したアイデンティティのうちに閉じ込められるばかりでなく、「われわれ」のあいだにある差異までもが覆い隠されてしまう。それはとりもなおさず、[1]社会に内在する亀裂を隠蔽することにほかならない。このことが「共生」という語を空虚なイメージに変えながら、自分と異なる者と共に生きることを妨げているのだとするなら、まずはもっと身近なところにある差異へ目を向けるべきであろう。

例えば、たとえ家族や友人のようなきわめて近しい隣人であっても、当然ながらけっして理解し尽くすことはできない。どれほど長く生活を共にしても、家族の未知の一面に気づくことはつねにありうるし、あるいは病床に横たわる友人の苦しむ姿にどれほど心が痛んだとしても、それは友人自身の病の苦しみを味わうことではない。それゆえ非常に親しい人であっても、自分と異なる以上、自分を投影して理解することは不可能なのだ。そのように、自分とけっして重なり合うことがないという意味で、[2]自分と、自分と異なる者とは徹底的に非対称である。ここからは、この自分とは非対称的な者を、「他者」と呼ぶことにしたい。そうすると、自分と異なるとはまず、このように自分と非対称であることであり、共生とはそのような他者と共に生きることであると言えよう。

さて、この他者について徹底的な思考を示すレヴィナスは、その『全体性と無限』のなかで、他者はその「顔」においてまさに「他者」として現われると述べている。ここで「顔」とは、人体の一部位としての顔面のことではなく、敢えてひと言で言うなら、真正面から向き合わせられる他者の姿である。その輪郭なき姿は、他者を特定の一面において捉えることをこれまで可能にしてきた、その他者についての手持ちの観念――例えば、役割や社会的類型のようなもの――を不断にはみ出していく。そ

のように自分と他者の非対称性を突きつける[3]他者の「顔」は、レヴィナスによれば、他者自身を「高み」から顕現させてもいる。この「高み」という言い方が暗示しているのはまず、他者と同一の平面に立ちえないことである。他者を理解し尽くせないとは、他者と同じ立場を共有できないということなのだ。

自分が「ここ」にいるかぎり、他者のいる「そこ」に立つことはけっしてできない。しかもこのとき、「ここ」と「そこ」を媒介する共通項も存在しない。他者はけっして自分の同類ではなく、むしろ自分は他者と何も共有していないかもしれないのだ。たとえ同じ言語を共有しているかに見えても、ちょっとした言葉遣いをめぐって行き違いが生じるだけで、「母語」という[4]見せかけの公分母が瓦解してしまう。あるいは、特定の人々によって定められた「人間」の概念が、「非人間」を生み出し、「非人間」と決めつけられた者たちの差別と収奪による支配を可能にしてきた植民地主義の歴史を顧みるならば、自分と他者を、「人間」の概念によってひと括りにすることさえもできないはずである。

このように、同一平面上で結びつくことを可能にする共通の公分母が存在しないという点で、自己と他者は、非対称であるばかりでなく、共約不可能でもある。自分と異なるとは、非対称にして共約不可能ということであり、共生とは、非対称にして共約不可能な他者と共に生きることなのである。では、そのような他者と共に生きるとは、より具体的にはどのような生の営みなのだろうか。

非対称的で共約不可能な他者と共に生きること、それは少なくとも生態系における生物どうしの「共棲」の観念から、またそのイメージにもとづいて構想される「自然の一部」としての調和的な「共生」の観念から区別されなければならない。なぜなら、こうした「共棲」ないし調和的「共生」の観念は、それぞれ異質であるはずの者たちを「自然」の名の下で同質化したうえで、「共棲」および「共生」を[5]閉鎖系の安定として思い描くことによって、結局は「異物」の排除を正当化してしまうのだから。だが、他者とはまさにこの「異物」でもありうる者のことではないか。そして、そのように異質な者と共に生きることを抜きにして「共生」を語ることに意味があるのだろうか。

あるいは他者と共に生きることは、多文化主義の下でしばしば語られる[6]「多文化共生」とも区別されなければならない。「多

文化」を語ること自体が、ともすれば一枚岩の全体としての「単一文化」が多様にあると想定するものであり、そのことは、一つの文化そのものが、各々それ自体複数性を刻印されている複数の文化の交渉によって成り立っていることを忘却することでもある。そればかりか、このとき「多文化」を語りうる立場が「普遍性」を自称する「西洋」の特権的な立場であることも忘却されている。そして、そのような二重の忘却にもとづく「多文化」の「共生」の観念が広く浸透するなら、植民地主義を押し進めてきた西洋中心主義が形を変えて、しかも体よく浸透し、かつての植民地支配の遺制や、現在も続く[7]植民地支配が美化されることにもなりかねない。しかし、非対称的で共約不可能な他者と共に生きる可能性は、「単一文化」なるものを想定し、その下に他者たちをひと括りにして支配してきた植民地主義的な他者への眼差しを内側から乗り越え、植民地支配の暴力を克服することによって、[8]他者にまさに「他者」として出会い直すところからこそ開かれるはずだ。その意味で他者と共に生きることは、「多文化」の「共生」ではなく、むしろ「ポストコロニアル」と形容されるべき共生である。このポストコロニアルな他者との共生が、「グローバリゼーション」の渦中に生きる者の課題ではないだろうか。

ところで、レヴィナスによれば、他者に遭遇するとき、他者に対してまったく無関心でいることはできない。他者の苦しみを気遣ったり、他者に手を差しのべたりするのみならず、他者を無視したり、共同体から排除したりすることも含めて、何らかの応答をしないわけにはいかないのだ。[9]他者の「顔」とはそれ自体、応答を迫る呼びかけなのである。ただし、他者の存在を無視したり、他者を排除したりすることは、他者からの呼びかけを黙殺して、その独自の存在を否認することである。他者と共に生きようとするならば、まず自分が出会った他者を「他者」であるがままに受け容れ、その呼びかけに応えなければならないはずだ。このことはまた、自分自身の「応答可能性」として、出会った他者に対する[10]「責任」を引き受けることでもあろう。この他者に対する責任にもとづいて、他者の特異な存在を肯定し、他者「と平和でいる」関係を築くことができるのではないか。[11]このことが世界のうちに、何も共有していない者たちが共に生きる余地を切り開いていくのではないだろうか。

（柿木伸之『パット剥ギトッテシマッタ後の世界へ』より）

〈注〉 レヴィナス…二十世紀フランスの哲学者(一九〇六～一九九五)。
ポストコロニアル…植民地主義以後。

問一 傍線部1で、「社会に内在する亀裂を隠蔽することにほかならない」と筆者が述べる理由として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 相手との差異が、肌の色や言語のように観察可能な表徴の差異に還元されてしまうから。
b 異なった言語や生活習慣をもつ他者と「われわれ」との区別が固定されてしまうから。
c 共通の言語や生活をもつ「われわれ」には差異がなく社会的に同一だと見なされるから。
d 他者との区別に基づいて、「われわれ」自身のアイデンティティが固定されてしまうから。

問二 傍線部2で、「徹底的に非対称である」という筆者の主張の内容を示すものとして、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 他者は、自分がどれほど努力してもすべてを理解することができない。
b 他者は、自分と重なり合う部分がまったくない点で異なる者である。
c 他者は、自分にはまったく未知で理解できない部分がつねにありうる。
d 他者は、自分自身の基準ではどうしても理解できない異なる者である。

問三　傍線部3の「他者の「顔」という語は本文中ではどのような意味をもつか、次の中から適切でないものを一つ選べ。

a　非対称的で正面から見ても輪郭がわからないもの。

b　特定の類型や立場をつねに逸脱してしまうもの。

c　自分の観念ではどうにも理解を確定できないもの。

d　自分とは共有できないあり方を突きつけてくるもの。

問四　傍線部4の「見せかけの公分母が瓦解してしまう」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自分と他者とが同類として共生できないことがわかる。

b　自分と他者とが非対称性をもつことがはっきりする。

c　自分と他者とが共有している言語に行き違いが生じる。

d　自分と他者とが共約不可能であることが明らかになる。

問五　傍線部5の「閉鎖系の安定として思い描く」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　生態系の内部では、生物どうしが異質であることを認めあって共存していると考える。

b　ちがった種類の生物であっても、自然においては同質的なものであると見なす。

c　自然の中では、異物である非対称的で共約不可能な者たちが共存していると考える。

d　ちがった種類の生物を、ある生態系の内部では安定的に共存していると見なす。

問六　傍線部6で、「多文化共生」を筆者はどのようなものと考えているか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　多様性をもつ多文化については、普遍的に語りうるような特別な立場はないと考えているもの。

b　複数の単一文化が存在することや、それを語る特権的な立場があることを前提としているもの。

c　一つの文化とは、多文化の交渉によって成立した複合的なものであることを認めているもの。

d　単一文化だけがあるのではなく、むしろ異なる多文化が併存していることを前提としているもの。

問七　傍線部7で、「植民地支配が美化される」と筆者が見なす理由として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　かつての植民地主義を招いた「多文化共生」を、二重の忘却が正当化してしまうことになるから。

b　想定をまちがえると「多文化共生」が特権的な一つの文化による多文化の評価を招いてしまうから。

c　他の個別的で多様な文化を調節しうる「西洋」文化の普遍性が当然なものとされるようになるから。

d　文化というものが、複数の文化の交渉に基づいて成立するものであることを忘却してしまうから。

問八　傍線部8の「他者にまさに「他者」として出会い直す」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　植民地主義におちいる特権的見方を改めて、異質な他者を異質であると理解しつつ受け入れる。

b　これまでの多文化主義では忘れられてきたそれぞれの文化の特殊性を重視して、共生をはかる。

c　これまでの西洋中心主義から脱却して、植民地と見なされてきた複数の文化との交渉を始める。

d　植民地主義のような暴力的な文化支配を超えて、異質な他者の文化と共存できる方法を見直す。

問九　傍線部9の「他者の「顔」とはそれ自体、応答を迫る呼びかけなのである」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　まったく異質なものではあるが、気遣いや無視などを含めた応答が可能であるような現れである。

b　自分と同じ類の人間が現すものであり、どれほど異質であっても黙殺や排除はできないものである。

c　非対称的で共約不可能な異物として遭遇するものだが、それでも共生せざるをえない人間である。

d　その独自の存在を無視したり黙殺してはならないような、自分が受け入れて共生すべき他者である。

問十　傍線部10の「「責任」を引き受ける」が意味する内容として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　他者は異者であるが、関心をもって応答せねばならないと考える。

b　他者の独自な存在を肯定し、黙殺せずに受け入れられると考える。

c　他者を応答できる相手と見なし、関心をもって気遣おうと考える。

d　他者の無視や排除をしてはならず、受容せねばならないと考える。

問十一　傍線部11のように筆者が主張する理由として、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　他者への眼差しを変革することで、植民地主義の暴力的思考を乗り越え、多文化共生の時代をもたらすことができるから。

b　非対称的で共約不可能な他者にも責任をもって応答することで、はじめて平和的な共生が可能になると思われるから。

c　社会に内在する亀裂を明るみに出すことによって、他者も自分も硬直したアイデンティティから解放されるから。

d　生態系での調和的「共生」という閉鎖的な観念を打破して、異質な他者と共に生きる真の「共生」が実現できるから。

二

次の文章は、木下杢太郎が田山花袋の小説「蒲団」を評したものである。これを読んで、後の問に答えよ。

主人公なる現代の小説家の日常生活の心理は甚だ巧に書けてゐる。固より三十五六の今の小説家の心理的生活の悉くを平均した結果が、この小説に現はれた主人公の夫れと甚だ近いものか否かは分らぬ。併し今の世、此くの如きの人はあり得ると思はれる程に巧に書けてゐる。予は始終小説ならぬ実際の人の自白を聴くやうに感じつつこの小説を読んだ。けれどもこの小説を読んでゐて、[1]かかる人には此くの如き心理現象があり得るだらうとは思つたが、あつたらしいといふ感じは起らなかつた。といふのは主人公以外の人はどうも朦朧としてゐて能く把持することが出来ない。即ちこの主人公は、例へば「芳子」といふ人間の女に恋慕したのではなくて、仮に「芳子」と名付くる一女性ありと仮定し、その女がこの小説にあるが如き関係に於てこの主人公と相対した時に、この主人公が感ずる可き心の働き如何を推断して記述したかの感がある。換言すれば作者の五官及び理性は作中の諸の人物に対して、その主人公に払つた丈の観察と同情とを払つて無い。「芳子」はこの篇中第二の重大なる位置に居る。彼女は「美しき」、「華かなる声」、「艶やかなる姿」の持主にして、能く「靴下を編み」、「襟巻を編み」、「衣裳を縫ふ」女らしくはあれど、彼女に一貫せる性格を見出すことが出来ない。又従つて彼の主人公に彼程の情動を惹起さしむる色香ある人間とは見受けられぬ。即ち[2]抽象の「場合」が衣裳を着て出て来た様にしか見られぬ。作者は固よりかの主人公の心理的経過を詳しく書く積りだつたらうが、吾人は、作者の好きなツルゲニエフが躍如として露西亜の貴婦人、田園の処女を写し出したやうに、明治の女学生をも写し出されむことを希望したのである。描写は可なり詳しいが、性格はどうも瞭りと出て来ない。神戸教会の秀才田中秀夫も同様である。殊にこの男は本郷座でやる色男のやうに、何時の時代の所産であるかも分り兼ねるやうだ。

総じて作者が断るやうに人物は動いてゐぬ。例へば作者の切言する程に、この主人公は孤独の感を抱いては居らぬやうだ。(といふと筋が合はないやうだが、あの時は恐かつたと話しても、聞く人にはそれ程恐かつたらうと思はれないことがあるを知つたら思ひ当るだらう)又作者は主人公が芳子に非常に執着してゐるやうにいふが、それ程でも無ささうだ、恋愛と肉

欲と交錯してゐるのはこの小説の面白い所だが、双方共非常に主人公の全人格を動かす程強いとも見えなかつた。主人公が少し融通がついたら、どつかの待合あたりで奇麗に忘れて仕舞ふ程としか思はれぬ。主人公の情動は、新しい美しい婢が来たとき、年上の長男がボウト上気する所らより深いとも思はれぬ。之に依つて、[3]巻の終りに主人公が女の蒲団の移り香を嗅ぐのは、少し戯け過ぎたやうに思はれる。ツルゲニエフの小説を読んだ後には読者も篇中の人と共に泣くが、この場合には読者も蒲団に入つて泣きたくなる様な気はどうも起らぬやうだ。(或は作者はツルゲニエフなどはもう古くてロマンチツク臭いといふかもしれぬ)だが巧みな所も少くない。例へば市ケ谷八幡のわたりの述懐などには自分もほとほと同感だつた。[4]此処では自然の無差別なる推移と保守的な「感情」を持つた人間の意匠と相去る遠きを思うて歎ぜざるを得なかつた。

前に言ひ残して置いたが、[5]作者には一種の自然観照の態度がある。之を作品から帰納して次の様なものではないかと推測してみた。(これは一般に自然派の態度だらうと思ふ。)即ち昔地球を中心とし、天球は之を囲むものなりと考へた如く、昔の小説は人間の七情を中心としてそれを通じて見える自然を画いた。然るところ近頃の科学的研究によつて、地球が天球の中心ではないことが分つたと同時に人間も亦大なる自然の一部であつて、それ以上ではないと考へることになつた。即ち自然研究より帰納し得たあらゆる法則は亦人間の上にも当箝まらなければならぬ。[6]昔の意味での、精神とか、生活力とかいふものは、人間には無い。人間の心的活動はその肉体に依従するもので、人間の全有機体は外囲の自然に依従する。故に人生の一擲一笑、皆之れ自然の法則に照し、外囲の自然を検することによつてその原因帰趣を知ることが出来る。斯くの如き態度で公平に人間を客観し、その結果に芸術的衣裳を着せたものが、之れ作者の(自然主義者の)態度ではあるまいか。故に自然派の理想的作品は、それが恍惚、歓喜等の気を人に吹きつけるとよりは、人生の帰趣を知らしめて読者は一種の知的の満足を得るところにその本領があるのかもしれない。故にそれが読者に与へる結果は、科学者の法則の説明が与へる結果に似てやや弱く、その代り着る所の芸術的衣裳によりてやや直覚的に(即ちあらゆる感官に具象して)得られた知的満足である。

而してこの読者に印象するところは儼然たる自然の大法則をほの透し見た時の崇拝と畏怖の情である。この崇拝、畏怖の情は、自然派作品の凡てに通じて存する暗潮であると思ふ。たとへばこの小説の主人公の煩悶のごときも、ものそのものは興も

なき、凡人の心的活動の一部である。けれども、その背後に、かかる場合にかかる人にかくかくの煩悶を起さすべき自然力といふもののあるのを見て一種の畏怖を感ずるのである。

7 併しこれを小説に求める為めには、読者の方に余程の用意がなければならぬ。或はツルゲニエフには古臭いロマンチツクがあるかもしれぬ。モオパツサンにはこの態度の外にあまりに強い厭世的主観があるかもしれぬ。はたゾラには少し不用な、匠気と脚色癖とがあるかも知れぬ。併し読者は却つてそれらの情的色彩によりて反つて深く自然力畏怖の性を印象せられる。即ち自己を天然の一隅に拉し去つて、人間を自然の一部として客観するといふ態度に縛れて、一方には、(作者があまり巧に人間を描写した為めか、乃至は作者が人物に同情しすぎた為めか。)更に強き同情が小説中の人物に吸取られて、我自らその主人公の煩悶に同化するといふ態度あるが故に、一層(朧げの度はより強いが)自然力畏怖の度も強い。然るにこの小説にあつては、8 作者があまりに自然主義的に過ぎて、病人の病状を懶く欠びしつつ記述する医者の如く冷静である故か、とんと小説の主人公に同情が起らず、痛切に黒波の如く立ち湧く自然力の強大をも感じない。吾人は唯だ動物学教科書に「動物にはその注意圏内なる異性が他の己れと同じき性のものに親むとき、その相通ぜしにあらざるやを疑ひ、嫉妬する性あり」といふ様な法則の例として人間生活の一部の記述を読む時のやうに冷淡にこの篇に対するに過ぎない。

(木下杢太郎「田山花袋氏の「蒲団」」より)

〔注〕 吾人…われわれ。 ツルゲニエフ…ツルゲーネフ。ロシアの小説家。一八一八～一八八三。 本郷座…東京帝国大学の近くにあった劇場。 待合…客が芸者などを呼んで遊ぶ茶屋。 七情…喜怒哀楽などの七種の感情。 一顰一笑…顔をしかめたり笑ったりすること。 帰趣…物事の落ち着くところ。 儼然…おごそかで近寄りがたいさま。 モオパツサン…モーパッサン。フランスの小説家。一八五〇～一八九三。 ゾラ…フランスの小説家。一八四〇～一九〇二。 匠気…技巧をひけらかそうとする気持。 拉し去つて…無理に連れ去って

問一　傍線部1について、次の問に答えよ。

(1)　傍線部1はどういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　主人公が示している心理現象は、起こる条件は整っているが、その条件の活用が不充分なので起きていることにはならないこと。

b　主人公が示している心理現象は、起こる必然性はあるが、他の偶然の事象に阻まれて起きたという確実性を持てないこと。

c　主人公が示している心理現象は、起こる予測は立てられるが、現実世界では起こり得ないということ。

d　主人公が示している心理現象は、起こる可能性はあるが、小説内で実際に起きているという現実感はないということ。

(2)　筆者が傍線部1のように考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　作者が、芳子の心理を描くことに専心し、主人公の描出において観察と同情をおろそかにしてしまったから。

b　主人公が向き合う他の人物の内面が書けていないので、他の人物に反応する主人公の心理にリアリティが保てなくなっているから。

c　作者の五官や理性が、主人公を描くことにのみ投与されてしまい、他の人物の情動を掬(すく)い上げることができず、人物関係が不明瞭(かりょう)になっているから。

d　主人公の芳子に対する恋慕の情は表現できているが、芳子の主人公に対する感情が充分には書かれていないから。

問二　傍線部2はどういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「芳子」が、一般的な女性性をもつ女性として描かれていること。

b　「芳子」の女らしさが、色香に特化されて表現されているということ。

c　「芳子」が、女性のなかでもとりわけ美しく華やかな女性として描かれていること。

d　「芳子」の女らしさが、声や姿という具体をもって表現されていること。

問三　傍線部3について、「少し戯(ざ)け過ぎた」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　書き方として、一般的な倫理を逸脱しているということ。

b　作者が珍奇をねらいすぎて、作品を不真面目にしたということ。

c　おおげさで、主人公の情動にそぐわないということ。

d　主人公の人格をないがしろにするものであるということ。

問四　傍線部4はどういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自然の運行と習慣を重んじる人間の営みとが無関係であることが表現されていて、しみじみと悲しく思ったということ。

b　自然の人間に対する残酷さと人間の自然に対する依存が対比的に描かれていて、悲しくも感動を覚えたということ。

c　自然の大きな流れと人間の小さくも謙虚な生き方が触れたり離れたりする様が表現されていて、感じ入ったということ。

d　自然の猛威とそれに抗う人間の誠実さがあまりにもかけ離れていることが描かれていて、暗澹(あんたん)たる思いにとらわれたということ。

問五　傍線部5について、「一種の自然観照の態度」とはどのようなものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　地球が天球の中心ではないように人間は自然の中心ではないので、自然が人間に与えている力を察知することが重要であるという考え。

b　人間の心的活動は自然に左右されやすいので、自然の科学的研究の成果を応用して人間の心理を見なければならないという考え。

c　人間は自然に依従する存在であるので、自然の法則と照合して人間を観察すれば人間がわかるという考え。

d　自然には科学的研究によって解明された法則があるように、人間にも固有の法則性があると仮定して人間を追究するのがよいという考え。

問六　傍線部6はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　今は人間の感情が変化しているので、昔と同様に人間をとらえることは不可能になっているということ。

b　今は、人間の感情を基点にして自然を見て描くという人間中心主義は成り立たないということ。

c　今は科学的研究の発達によって人間観が変容したので、旧来の人間観は棄てるべきであるということ。

d　今は、科学的研究の成果を受けとめ新しい人間観を樹立しなければならないということ。

問七　傍線部7について、「読者の方に余程の用意がなければならぬ」とするその「用意」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　人間を自然の一部として客観する態度。

b　主人公に同情し共感する態度。

c　自然に接近するための厭世的態度。

d　自然の法則を崇拝し畏怖する態度。

問八　傍線部8は、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自然主義を信奉するあまりその理念しか伝えられないこと。

b　自然主義の理想が高すぎて作者の表現力が追い着かないこと。

c　人間を科学的にとらえすぎて人間が物のようになってしまうこと。

d　人間を自然の一部として客観するあまり淡々と記述しすぎること。

問九　次の中から、自然主義の作家を一人選べ。

a　尾崎紅葉　　b　樋口一葉　　c　正宗白鳥　　d　徳冨蘆花　　e　泉鏡花

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

映画館の客席。コーヒーショップの客席。コンサートホールの客席。レストランの客席。新幹線の客席。

客席は、多くの客を迎え入れるために用意された「複製産物」であると言ってよい。

客席だって商品だ。客席を作るメーカーは、それを商品として作っている。だから複製産物であるのは当たり前である。オートメーション化されているならば、ある一つの「鋳型」と、それを作るための設計図があり(あるいは、「鋳型」となるべきものは、いまの時代には最早ないのかもしれないが)、自動機械はその設計図に沿って商品を作るための、緻密なプログラミングがなされている。

もしかしたら、ところどころに人の手が入るかもしれないが、これもまた流れ作業という、一貫した統制のもとで行われるプログラム化された動きで賄われるがゆえに、自動化した複製の一過程であるとみなせることから、[1]とりたてて騒ぎ立てるものでもない。

ドイツの高名な批評家ベンヤミンは、映画を「複製芸術」とみなしたが、彼がそうみなした根底には、一九世紀あたりから発達した複製技術があった。

映画のフィルムを複製、あるいはデジタル化するための、それ自身がすでにデジタル化したメディアによって大量に生産され得る形態の、誰でもどこでも見たいときに鑑賞できる芸術、それこそが複製芸術である。かつては映画館でのみ見ることができた映画も、DVDやブルーレイディスクの普及によって、誰でもどこでも見ることができるようになった。もちろん、映画館で上映されている期間は、映画館でないと鑑賞できないという制限はあるが、それを除けば、[2]まさにボーダーレスである。さらに言えば、こうしたデジタルメディア自体が複製産物なのであって、その複製産物上に記録された映画がさらに、自ら複製産物となって見る人の脳裏に焼きついていくのである。

映画館は、限られた期間内になるべく多くの客に見てもらうために、客席を用意する。

映画は、その人数分だけ、明らかに客の脳の中に記憶として残る。映画館という「複製的空間」の中で、映画が脳の中に「複製」されるのである。そのために映画館は客席をたくさん用意する。せっかく二〇〇席用意しても客が五十人くらいしか入らないこともあるだろうが、そんなことは問題ではない。

ビールは商品であり、そのビールを入れておくビール瓶もまた商品だ。そしてそれらの商品を作るのは、これまた多様なメーカーである。

メーカーは、ある雛型(あるいは設計図)をもとに、商品を大量に複製して生産する。谷中の酒屋の店先で見たのは、その結果としての複製産物の集合体であった。

同様に、[3]客席も商品であるが、複製論的な実情はやや複雑である。

まず、客席は客席メーカーにとっては商品だが、映画館にとっては、商品を売るために必要な道具にすぎない。もちろん複製芸術としての映画は、メーカーが作る実体的な商品のように、直接客に売るようなものではないが、そのかわりに映画館は間接的に、客に実体験ならびに記憶としてそれを「複製」し、売っていることになる。映画の複製の場としての複製的空間をより充実したものとするために、客席をたくさん用意しているということもできよう。[4]

メーカーが客席の「複製装置」であり、客席が「複製産物」であるのならば、その客席は、映画館という複製的空間の中で今度は自らが「複製装置」となって、客の脳内に映画を複製するのである。

ここで、面白いことがある。

客席が完全に埋まって「満員御礼」となっているよりも、ある程度は客席に余裕がある方が、「脳内に映画を複製される」側である私たち客としては落ち着くということである。

自らが、複製産物に価値を見出し、そうした社会を形成してきたことからもわかる通り、[5]人間は、何かを複製するのが大好

きな生き物だ。何でも複製したがる。複製して喜ぶ。複製して楽しむ。複製産物を買い、複製産物に囲まれて生きる。

しかし、自分自身もまた生物で、複製産物であるにもかかわらず、[6]自分自身が複製の対象になるのはどうも虫が好かないらしい。クローン人間に対する倫理的拒否感が、これを如実に物語っている。

複製産物に囲まれて生き、自らも複製産物であるはずなのに、人間たちは自分自身でそう感じているところがないからこそ、複製とかクローンとか、そうした言葉を自らの経験に含めたいとは思わないのかもしれない。

誰だって、一列に並ばされ、品定めされる自分を想像するとイヤになる。そうした心の動きとおそらく根は同じなのであろう。

このことは、人間という存在が、「複製」という生物本来の生き様、「複製産物」という生物本来の姿に何とか対抗し、そこから抜け出そうとしてもがきながら生きている存在なのだということを強く示唆していると、筆者はそう思うのである。

（武村政春「レプリカ――文化と進化の複製博物館」）

〈注〉ビールは商品であり…筆者は、この文章に先立って、ビール瓶に占拠されたかのような酒屋の風景に言及している。

問一　傍線部1のように筆者が考えるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　機械が商品を生産する過程で人が関与しても、その人の関与に複製技術が生かされているに決まっているから。

b　機械が商品を生産する過程で人が関与しても、その人の関与に複製産物は左右されないから。

c　機械が商品を生産する過程で人が関与しても、その人の関与もところどころであれば問題にならないから。

d　機械が商品を生産する過程で人が関与しても、その人の関与も自動化の中に組み込まれているから。

問二　傍線部2はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　映画が、デジタル技術の発達によって多様な機械で時間・空間に限定されずに見られるようになったこと。

b　今日のように、グローバル化が進んだ世界では、人もモノも自由に国境を越えて行き来するということ。

c　ＤＶＤやブルーレイディスクによって高画質な映像を作ることができるようになったが、それは映画館では使えないということ。

d　デジタルメディアが自ら複製産物となり、それを目にする人の脳裏に強く焼きつくようになったということ。

問三　傍線部3について「やや複雑である」と筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　客席は売り手にとっては商品であるが、買い手の映画館にとっては、より良い映画鑑賞の場を作るための一要素に過ぎないものだから。

b　メーカーにとって客席は商品そのものであるが、映画館にとっての客席は、映画に付随する装置として間接的に商品たりうるものだから。

c　ビールにとってのビール瓶の場合と異なり、映画館にとっての客席は、それ一つで映画鑑賞が可能になるわけではない点で、商品としての性質に違いがあるから。

d　ビール瓶は、ある設計図に従い大量に生産できるものだが、客席の場合は、ときに人手が必要なこともあり、自動複製は出来ても、大量生産にはなじまないものだから。

問四　以下のa～eのうち、傍線部4における「複製装置」に相当するものをA、「複製産物」に相当するものをB、どちらにも当たらないものをCとせよ。

a　客にとってのコーヒーショップ

b　メーカーにとってのビール瓶

c　映画館にとっての客席

d　筆者にとっての人間という生物

e　DVDやブルーレイディスクに記録された映画

問五　傍線部5「人間は、何かを複製するのが大好きな生き物だ」とあるが、筆者は「人間」についてどのようなものと認識しているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　人間は、複製とかクローンという言葉には生理的嫌悪を示すのに、複製産物には称賛を示す存在。

b　人間は、倫理を形成してきた生物の特質として複製の横行には厳しく、クローン人間には否定的な存在。

c　人間は、複製産物に囲まれて生きているので、自らが複製産物であることを当然として受け入れている存在。

d　人間は、生物であることによって規定されている複製産物であることから逃れようと、格闘している存在。

問六　傍線部6のように筆者が人間について思うのは、なぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　人間が、自らクローン人間を作ることは、自分の尊厳がおびやかされる気がするから。

b　人間が、複製産物として店に並べられる商品のように画一的なものと見られるのは、自尊心を傷つけられる気がするから。

c　人間が、複製産物であることは観念上ではわかっていても、これを言葉で明示されるのは気分が悪いと思われるから。

d　人間が、自分たちに必要な商品としての複製産物を入手するのは嬉しいが、自分も複製産物であると認めるのは理不尽な気がするから。